

県内コメ農家 打撃

新米概算金 4割超下落

全国農業協同組合連合会本部（JA全農岐阜）は21日までに、県内の2026年産の新米の主要銘柄について、各JAグループが農家に前払いする「概算金」の目安額を昨年と比べて1万円以上引き下げたことが分かった。全国各地と同様にコメ余りで在庫が積み上がっていることが主な理由。いずれも4割以上の引き下げで、下落幅としては過去最大とみられる。

【関連記事4面に】

生産コストも増「採算合わぬ」



コメの収穫作業を進める生産者＝8月、海津市海津町福江

2026年産米の概算金が大幅に下落する見通しとなったことを受け、県内の農家からは今後の農業経営を不安視する声が上がっている。「令和の米騒動」を背景に価格が高騰して収益改善につながった昨年が一転、生産コストも高止まりし、「この価格では採算が合わない」と、経営への打撃を懸念している。高山市の農事組合法人代表（64）は「今年は下がり過ぎ」と嘆く。ブランド評価の高い飛騨コシヒカリは比較的ましだとしつつ、「平地の産地はもっと大変だろう」と指摘。機械や資材が値上がりする中、「昨年並みなら適正で持続可能だと感じるが、2万円を切っては農家が困ってしまう」と話す。

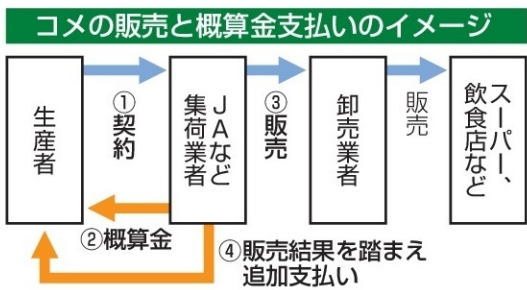
農家 価格急変動、国に対策要求

も被害を受けるため、電気柵の設置が欠かせず、「その分のコストも増している」と環境の変化を訴える。揖斐郡で約5畝を耕作する70代の農家は昨年、山間部の田んぼに大手外食チェーン関係者が突然、「コメを譲ってほしい」と訪ねてきたという。「それぐらいコメが不足していた」と振り返る。昨年の高値について「近年のコスト高を考えると本当にありがたかった。久しぶりにかなり利益が出て、新しく農地を買おうという意欲も出た」と話す。だからこそ、今回の急落への戸惑いは大きい。「収穫できる年、できない年、コメ不足、コメ余りなど、どうしようもできない年があるのは分かる。ただ、概算金や価格が急激に変動するのは本当に困る。毎年ある程度一定であってほしい」と訴え、国による農家への支援を求める。

コメの概算金 JAグループがコメを集荷する際、生産者に支払う前払い金。全国農業協同組合連合会（JA全農）の県本部などが作付け状況や消費動向を踏まえて決め、収穫した新米の店頭価格の目安になる。2025年産はコメ不足でJA以外の業者との集荷競争が激化して各地で概算金がつり上がった。

26年産の概算金の目安額は1等米60キロ当たりで、飛騨コシヒカリが1万8100円（前年比41・6％減）、美濃コシヒカリ（特A地区）が1万6700円（43・6％減）、ハツシモ（43・6％減）が1万6100円（44・5％減）。大幅な引き下げとなった背景には、24年夏以降、猛暑などの影響でコメが品薄となり、価格が高騰する「令和の米騒動」が起き、25年

産米で集荷競争が激化し、全国的に概算金がつり上がった経緯がある。24年産は飛騨コシヒカリが1万8千円、美濃コシヒカリが1万7200円、ハツシモが1万6600円で、2年前の水準に戻った形となる。しかし、物価高で生産コストは当時よりも増大しており、農家の経営に影響を与えそう。



中津川市の男性農家は農業協同組合（JA）と取引していないため、今年は概算金を参考にせず販売価格を設定した。「24年産、25年産でも農家にとっては同じ手間とコストをかけた同じコメ。これほど価値が下がるというのは『きつい』を通り越している」と肩を落とす。これまではJA米と店頭価格が離れすぎないよう概算金を参考にしていたが、今回は下げ幅が大き

いたが、今回は下げ幅が大きく断念。「消費者に手に取ってもらえなければ、価格を少しずつ下げていくしかない。どこに予先を向ければいいのか分からない」と苦悩する。

海津市で大規模農業を営む福江営農の後藤昌宏社長（66）も「経営者として大幅な下落は痛手」と話す。生産コスト面で大規模経営は効率化を進められる一方、「中山間地など1枚当たりの農地が小さい農家ほど影響は大きい」とみ

JA全農岐阜が定めた概算金の目安額

	飛騨コシヒカリ	美濃コシヒカリ	ハツシモ
2024年産	1万8000円	1万7200円	1万6600円
25年産	3万1000円	2万9600円	2万9000円
26年産	1万8100円	1万6700円	1万6100円

（浜田悠、箕浦由美子、湯浅裕作、稲木悠司）